



山中 祥弘
メイ・ウシヤマ学園
ハリウッド大学院大学
教授・学長・理事長

清里でP.F・ドラッカーと論争

「時」は、私の学生時代、日本は戦後復興を遂げ世界へ飛躍しようとしていた東京オリンピックが開催される直前の1964年7月。「所」は山梨県清里高原の財団法人キープ協会「清泉寮」。その創立者ポール・ラッシュ先生は、来日(1925年)以来、関東大震災復興および戦後復興など、日本のために生涯貢献された。また、私の恩師であり、義父母のハリウッドグループ創立(1925年)以来の恩人でもある。

この「写真」はポール・ラッシュ先生の提案で清里訪問中のドラッカー先生の「早稲田大学産業経済研究会」清泉寮ゼミが開催された時のスナップだ。そこで、ドラッカー先生は日本の将来について、戦後日本の復興を築いた優れた経営者の次の世代が育っていないのが問題であり、今までのような成長は期待できないと指摘した。

それに対し、われわれは先達の敗戦の失敗と戦後復興の成功から多くのことを学び、さらに、先達を乗り越えようとア

メリカの優れた経営と技術を学ぼうとしている。われわれの時代には、日本企業はアメリカ企業を脅かす時が来るであろうと、若気の至りの反論であったが、内心は本気であった。

この清里ゼミのことが、のちに出版(1964年10月)された『ドラッカー 経営とはなにか』(日本事務能率協会)の序文に次のように紹介されている。

たまたま、日本アルプスの山頂で出会った一団の若い人々が語ってくれた。「たしかに日本の若い世代の前途には幾多の問題があると思いますが、われわれの一番大きな問題は、経営において、われわれの先達が、過去10年間に築いてきた業績にはじないよう行動するということでありましょう」という言葉ほど私は感動させられたものはない。

一人の若者の意見にも、^{しんし}真摯に耳を傾ける偉大なドラッカー先生の柔軟な思考と人柄に、私もこれほど感動させられたものはない。



左から4人目の男性がドラッカー氏、3人目が筆者